〔学生の精神衛生研究班〕

大学生の大学生活への適応過程に関する研究 (1)

——大学1年次における体育連盟所属学生と一般学生との比較——

都筑　学　八島　健司
深瀬　吉邦　西谷　明子
宮本　知次　白　善美

要　約

本研究の目的は，大学という新しい環境に移行してきた新入生の大学生活への意識，心理的ストレスやストレッサー，自己評価，ソーシャル・サポートについて分析することであった。1997年度の新入生の中から，一般学生532名，体連の学生236名，合計768名に調査を実施した。得られた主な結果は，以下のとおりである。

1) 体連の学生は，一般学生よりも大学や所属する部への強い帰属意識を持ち，学部・学科・専攻への帰属意識が弱かった。
2) 体連の学生は，部での活躍を期待する一方で，学業に関する期待が一般学生よりも弱かった。
3) 身体的疲労を訴える学生が約4割いた。体連の学生は一般学生よりも勉強や部活動に関するストレッサーを多く体験していた。
4) 一般学生と体連の学生との間に自尊心の強さに差はみられなかった。
5) 約6割の学生が6～15名の対人ネットワークを持ち，1～5名の対人ネットワークしか持たないのは約2割の学生だけだった。
6) 体連の学生は，一般学生よりも家族や異性の友人からのソーシャル・サポートを強く受けていると考えていた。

以上のような傾向が，一般学生や体連の学生の生活状況との関連で考察された。

I　目　　的

大学に入学した新入生が，大学という新しい環境に移行していく際には，様々な心理的葛藤や不安を経験し，そのストレスから精神衛生上の問題が生じやすい（山本・Wapner，1992)。たとえば，大学における授業形態やクラス集団の形式，教師との関係などは高校までとはかなり異なるために，それらに慣れるには，ある程度の時間を要するだろう。また，入学にともなって故郷を離れて，家族と一緒の自宅生活から一人の下宿生活を始める学生の場合には，生活上の変化はとりわけ大きく，新しい生活における戸惑いも少なくないだろう。本学では，学生の大学生活に対する意識を4年に一度，全学アンケート調査によって分析している。ただし，その調査は横断的なものであり，新入生が大学に入学してから，新しい生活にいかに適応していくかについて縦断的に検討していくことは重要な課題として残されている。

ところで，本学の学生には，各種の入学試験に合格して入学してくる一般学生と並んで，スポーツの競技成績によって推薦入学して学友会の体育連盟に所属する学生（以下，「体連の学生」と省略する）がいる。われわれは，これまでに，こうした体連の学生や運動系サークルに所属する一般学生を含めた運動部系学生の不安に関する意識調査を行ってきた（都筑他，1991)。それによると，運動部系学生は，自分の体調や体型について気にしている者が多く，対人不安や特性不安が低い傾向にあった。また，運動部系学生の中でも，体連の学生は単位が取れるかどうか心配だというような学業生活に関する不安が高い傾向にあった。これらのことから，体連の学生と一般学生との間には，学生生活の重点の置き方において違いがあると同時に，大学生活上での意識においても差異が見られると考えられる。

以上のことをふまえて，われわれは体連の学生と一般学生とを比較しながら，彼らが大学生活に適応していく過程を縦断的に研究していく研究計画を立て，1997年度より調査を開始した。本論文では，1997年7月に実施した第1回目の調査データについて報告し，新入生の大学生活への意識，心理的ストレスやストレッサー，自己評価，対人関係，ソーシャル・サポートについて分析する。

（都筑　学）

II 方　　法

調査内容

1. フェースシート

性別，年齢，学部，所属している部・サークルなど12項目。

2. 大学生活についての意識

2－1　大学および学内の集団への帰属意識

大学，学部・学科・専攻，クラスやゼミ，部・サークルに対する帰属意識を尋ねる5項目を選んだ。

2－2　大学への進学理由

1992年度全学アンケート調査報告書を参考にして，大学への進学理由についての8項目を選んだ。

2－3　大学生活への期待

1992年度全学アンケート調査報告書を参考にして，大学生活への期待についての11項目を選んだ。

3. 心身の適応状態

3－1　心理的ストレス反応尺度

新名・坂田・矢富・本間(1990)，田中(1995)，尾関(1990, 1993)，尾関・原口・津田(1994)を参考にしながら，心理的ストレス反応を測定する35項目を選んだ。

3－2　ストレッサー尺度

尾関（1990），尾関（1993），尾関・原口・津田（1994）を参考にしながら，大学生活で体験される不快と評価されるような出来事と考えられる39項目を選んだ。

4. 自己評価

Rosenberg(1965）の自尊心尺度10項目を用いた。

5. 対人関係

古城・岡野（1988 a），古城&岡野（1988 b），小泉（1986）の研究を参考にして，対人関係のネットワークを調査する方法を作成した。まず最初に，「自分とかかわりの深い人や何らかの意味で大切な人」を思い浮かべてもらい（最大30人），その人物との関係も書いてもらった。次に，タテ19.5 cm，ヨコ13.5 cmの四角の枠の中央に自分を表す円が描かれた用紙に，上述の人物を「親しく感じられる人ほど自分を表す円に近くなるよう」描くことを求めた。

6. ソーシャル・サポート

嶋（1991，1992）のソーシャル・サポート質問紙（12項目）を用い，家族・同性の友人・異性の友人のそれぞれについて評定してもらった。

調査対象　中央大学1年生768名（男子519名，女子245名，不明4名）。平均年齢19.3歳（標準偏差1.06歳）。

学生の所属学部は，法学部169名，経済学部197名，商学部107名，理工学部85名，文学部155名，総合政策学部49名，不明6名だった。

調査手続　体連の学生については，学友会および各部の部長，監督を通して調査への協力を依頼し，学生に昼休みの時間帯に集合してもらい，体育館の教室において集団で調査を実施した。34の部に依頼状を出し，最終的には31の部に所属する学生からの回答を得ることができた。一般学生については，体育実技の授業時間に，担当教員を通して調査への協力を依頼し，集団で調査を実施した。

調査期間　1997年7月

（都筑　学）

Ⅲ　結果と考察

1. フェースシート

対象者のうち，部またはサークルに所属している学生は607名（79.0%），所属していない学生は152名（19.8%）だった（無回答9名。以下の分析では，各項目において異なる人数の無回答を含むので，統計は必ずしも768名にはならない）。そのうち，部またはサークルに所属する学生の内訳は，体育連盟236名，体育同好会連盟67名，学術連盟26名，文化連盟38名，学芸連盟19名，学友連盟6名，理工連盟7名，未公認部会73名だった。

男女比は，一般学生では男子318名（60.1%），女子211名（39.9%），体連の学生は男子202

名（85.6%），女子34名（14.4%）だった。体育連盟には女子の競技が少ないために，体連の学生は一般学生に比べて男子の比率が高い。

また，現在住んでいる所は，一般学生では自宅60.6%，下宿35.0%，寮2.1%，その他2.3%，体連の学生では自宅24.6%，下宿15.3%，寮57.2%，その他3.0%だった。体連の学生のうち，推薦入学の学生は特定の部（硬式野球部，スケート部，ラグビー部）を除いて日野市南平にある寮で生活している。また，入学後に入部した学生は，寮で生活する場合もあるが，大半の学生は自宅あるいは下宿に住んでいる。

以下の分析では，一般学生532名と体連の学生236名との比較を行う。

2. 大学生活についての意識

2－1　大学ならびに集団への帰属意識

「全く帰属意識を感じていない」「あまり帰属意識を感じていない」を併せて帰属意識なし，「やや帰属意識を感じている」「非常に帰属意識を感じている」を併せて帰属意識ありとした。

1）　大学への帰属意識

体連の学生では，帰属意識なしが35.2%，帰属意識ありが60.6%，一般学生では，帰属意識なしが43.0%，帰属意識ありが54.9%だった。体連の学生の方が，一般学生よりも大学への帰属意識がほんのわずかであるが強い傾向にあった。

2）　学部・学科・専攻（コース）への帰属意識

体連の学生では，帰属意識なしが45.3%，帰属意識ありが50.4%，一般学生では，帰属意識なしが41.5%，帰属意識ありが56.4%だった。体連の学生の方と一般学生との間に，学部・学科・専攻（コース）への帰属意識には大きな差異は認められなかった。また，一般学生の場合には，大学への帰属意識と学部・学科・専攻（コース）への帰属意識との間には差が見られなかったのに対して，体連の学生の場合には，大学への帰属意識に比べて，学部・学科・専攻（コース）への帰属意識が弱くなる傾向にあった。

3）　クラスへの帰属意識

体連の学生では，帰属意識なしが44.9%，帰属意識ありが52.5%，一般学生では，帰属意識なしが41.9%，帰属意識ありが55.3%だった。体連の学生と一般学生との間には，差異が認められなかった。

4）　ゼミへの帰属意識

各学部によって1年生の授業科目やゼミ制度は異なり，1年生でゼミに所属している学生は相対的に少ない。その人数は，体連の学生59名（25.0%），一般学生168名（31.6%）だった。

そのうち，体連の学生では，ゼミへの帰属意識なしが52.5%，帰属意識ありが47.5%，一般学生では，帰属意識なしが51.2%，帰属意識ありが48.8%であり，ほとんど差異がなかった。

5）　部・サークルへの帰属意識

一般学生において，部・サークルに所属している者は390名（74.7%），所属していない者は132名（25.3%）だった。部・サークルに所属している一般学生の中で，帰属意識なしが33.3%，帰属意識ありが66.7%だった。体連の学生では，帰属意識なしが11.4%，帰属意識ありが82.3%だった。一般学生に比べて，体連の学生は自分が所属する部に対する帰属意識を強く感じている。体連の学生の多くは，スポーツ能力を認められて推薦入学してきており，入学後は，大部分が寮で共同生活をしながら，それぞれの競技に取り組んでいる。そのことが，このような部活動への帰属意識の強さとしてあらわれていると考えられる。

大学等への帰属意識について，一般学生に比べて体連の学生は，大学への帰属意識がわずかに強く，学部・学科・専攻（コース）への帰属意識が弱い傾向にあった。部・サークルに所属している一般学生と比較して，体連の学生の部活動に対する帰属意識は非常に強く，特徴的であった。

（都筑　学）

表1　大学等への帰属意識

（%）

	一般学生		体連の学生	
	帰属意識なし	帰属意識あり	帰属意識なし	帰属意識あり
中央大学	229 (43.0)	292 (54.9)	83 (35.2)	143 (60.6)
学部・学科・専攻（コース）	221 (41.5)	300 (56.4)	107 (45.3)	119 (50.4)
クラス	223 (41.9)	294 (55.3)	106 (44.9)	124 (52.5)
ゼミ	86 (51.2)	82 (48.8)	31 (52.5)	28 (47.5)
部・サークル	130 (33.3)	260 (66.7)	27 (11.4)	206 (82.3)

2－2　大学への進学理由

大学への進学理由に関して，「全くそう思わなかった」「あまりそう思わなかった」を併せて否定的，「ややそう思った」「非常にそう思った」を肯定的とした。

1）　学問をしたかったから

一般学生と体連の学生では明確な有意差がみられる。一般学生が「ややそう思った」(44.2%)「非常にそう思った」(35.3%）の肯定的が79.5%になっているのに対して，体連の学生は否定的が多く，「全くそう思わなかった」(17.9%)「あまりそう思わなかった」(26.4%）を併せて

44.3% にもなっている。一般学生は学問をすることを意識して入学してきているのに対して，体連の学生は学問以外の目的，すなわち各運動部での活動を意識して入学してきている傾向にあるといえよう。

2） 人格形成の機会を得たいから

この項目では，両者には有意差はみられない。ただ，「全くそう思わなかった」の割合は，一般学生は 8.7% に対して，体連の学生は 15.0% である。一般学生の方が体連の学生よりも，人格形成の機会を得たいと期待している傾向にある。

3） 職業に役立つ知識を得たいから

この項目では，両方の学生とも肯定的に思っている。一般学生は 80.7%，体連の学生は 74.9% が肯定的である。学生は，大学での知識習得を将来に役立てたいと考えているといえよう。

4） 大学生活を通じて青春を楽しみたいから

一般学生も体連の学生も，80% 近くが肯定的に思っており，学生時代には青春を楽しみたいと考えている。

5） 友人を得たいから

一般学生（80.1%），体連の学生（74.0%）ともに，大学時代に友人を得ることを願望している。

6） みんなが大学に進学するから

この項目に関しては，両者には明確な有意差が認められる。一般の学生では肯定的が 51.4% に対して，体連の学生は否定的が 66.4% であり，両者の傾向は異なっていた。

7） 父母などに奨められたから

進学に関して父母の影響は，一般学生，体連の学生の両方ともにあまり受けない傾向にある。

8） 自由な時間を持ちたいから

一般学生の 56.7% の者は，進学することによって自由時間ができると思うのに関して，体連の学生は，61.0% の者が自由時間がないと思っている。両者の間には明らかに差異が認められる。これは運動部に所属することにより，練習や合宿所における集団生活，特に 1 年生は雑用による自分の時間がないことを示しているといえるだろう。

一般学生，体連の学生ともに，学問や友人との関わりを通じて自らの人格を形成したり，将来の職業に役立つ知識を得るために大学に進学したと考えている。青春を楽しみたいという思いも強い。ただし，体連の学生は一般学生と比較して，大学において学問を学びたいという意

識がやや弱い傾向にある。体連の学生の中には，運動部における部活動を中心とした学生生活を思い描く者が多いことによると思われる。

（八島健司）

表2　大学進学の動機

（%）

	一般学生		体連の学生	
	肯定的	否定的	肯定的	否定的
学問をしたい	421 (79.5)	109 (20.6)	131 (55.8)	104 (44.3)
人格形成の機会	380 (71.9)	149 (28.3)	146 (62.4)	88 (37.6)
職業に役立つ	427 (80.7)	102 (19.3)	173 (74.9)	58 (25.1)
青春を楽しむ	421 (79.5)	108 (20.4)	182 (77.2)	54 (22.9)
友人を得たい	423 (80.1)	105 (19.9)	176 (74.6)	60 (25.5)
みんなが進学する	272 (51.4)	257 (48.5)	79 (33.7)	156 (66.4)
父母などの奨め	154 (29.2)	373 (70.8)	83 (35.4)	152 (64.6)
自由な時間を持つ	300 (56.7)	229 (43.2)	92 (38.9)	144 (61.0)

2－3　大学生活への期待

「全く期待していない」「あまり期待していない」を期待しないに，「やや期待している」「非常に期待している」を期待するに分類した。

1）親しい友人と出会うこと

前述の進学動機の「友人を得たい」の項目と同様に，一般学生も体連の学生もともに，大多数の学生は大学時代に親しくなれる友人をつくることを切望している。

2）よい学業成績を取ること

一般学生はよい成績を取ることを期待しているが57.9%に対して，体連の学生はそれを期待していないが61.5%で，明確に差異が認められる。一般学生はよい成績を取ることによって将来の就職などに大きな影響があることを認識している。体連の学生はよい学業成績を取ることが大変困難なことであり，そのことよりも，よい競技成績を重要視しているのでこのような傾向が見られるのではないかと思われる。

3）部・サークルの活動で活躍すること

一般学生は活動に関して期待すると期待しないが半数ずつであるが，体連の学生は期待するが87.6%となっており，両者に明確な差異が認められる。一般学生は，1年生の7月の時点では，入会や入部をしていない学生も少なくないため，サークル活動や部活動に対して願望的な要素を含んでいるとも考えられる。それに対して，体連の学生はすでに競技会や大会が開催され，現実的に活躍の場が設定されているので，期待するが多くなるといえよう。

4）　専門的知識や高度の技術を習得すること

一般学生は，専門的知識を習得することを期待するのは 78.5% であるが，体連の学生は期待するが 58.3% と，かなり低くなっている。一般学生は体連の学生よりも，専門的な知識や高度な技術の習得に関して積極的な傾向にある。

5）　資格を取得すること

体連の学生は資格に関して期待すると期待しないが半数であるが，一般学生においては期待するが 73.6% であり，明確な差異が認められる。一般学生において，資格取得は将来設計にも関わりを持つことになる。そのため資格取得は学生時代の重要なポイントとなると考えられる。

6）　豊かな教養を身につけること

一般学生の 82.0% が豊かな教養をつけることを期待しており，体連の学生の 70.7% よりも高く，一般学生の方が豊かな教養を身につけたいという意識が強い傾向にある。

7）　就職試験に合格すること

両者の間には差異は見られないが，期待しない者の割合は，体連の学生が 35.7%，一般学生では 24.1% であり，体連の学生は一般学生よりも就職に関して関心が低い傾向にあるといえよう。

8）　素晴らしい異性と出会うこと

体連の学生は 76.3% が，一般学生は 69.2% が異性との出会いを期待しており，差異が認められる。体連の学生は，高校まで部活動を中心の生活となっているため異性との出会いが少ないので，大学になるとその可能性を期待しているのではないかと考えられる。

9）　人間的に成長すること

一般学生，体連の学生ともに，大学生として人間的な成長を非常に期待している。

10）　自由に遊べること

両者において差異は認められないが，期待しない者の割合が，一般学生 28.4%，体連の学生 38.6% であり，体連の学生の方が自由に遊べると期待している者が少ない傾向にある。体連の学生においては，一年生の合宿所生活では自由な時間と自由な遊びはなかなか困難だと考えているのではないだろうか。

11）　自分の可能性をいろいろと試すこと

自分の可能性に関しては，両者とも期待している者が大多数である。大学生時代に自分の可能性を試みようと思っている傾向にある。

一般学生，体連の学生とともに，大学生活において，新しい友人との出会いや自らの人間的成長，新しい可能性へのチャレンジを非常に強く期待している。体連の学生は，よい学業成績を取ることや専門知識・高度の技術の習得，資格の習得，自由に遊べることに関しては，一般学生よりも期待度が低い傾向にある。また，体連の学生は一般学生よりも，部・サークルで活躍することを強く期待している。こうした結果は，前述の大学進学動機の結果とも関連しており，体連の学生の大学生活に対する期待が一般学生とは異なっていることを示している。

（八島　健司）

表3　大学生活への期待

(%)

	一般学生		体連の学生	
	期待する	期待しない	期待する	期待しない
友人と出会う	471 (88.8)	59 (11.1)	205 (86.9)	31 (13.1)
よい学業成績を取る	307 (57.9)	223 (42.1)	90 (38.4)	144 (61.5)
部・サークルで活躍する	264 (50.0)	264 (50.0)	204 (87.6)	29 (12.4)
専門知識・高度の技術の習得	416 (78.5)	114 (21.5)	137 (58.3)	98 (41.7)
資格を取得する	389 (73.6)	140 (28.5)	117 (50.0)	117 (50.0)
豊かな教養を身につける	433 (82.0)	95 (18.0)	166 (70.7)	69 (29.4)
就職試験に合格する	347 (65.9)	179 (24.1)	151 (64.3)	84 (35.7)
異性に出会う	365 (69.2)	162 (30.8)	180 (76.3)	56 (23.7)
人間的に成長する	463 (87.5)	66 (12.5)	218 (92.3)	18 (7.7)
自由に遊べる	379 (71.6)	150 (28.4)	145 (61.4)	91 (38.6)
自分の可能性を試す	464 (87.7)	65 (12.3)	206 (87.3)	30 (12.7)

3. 心身の適応状態

3－1　心理的ストレス反応尺度

産業疲労研究会の自覚的症状調査票をもとに，神経系ストレス，身体的ストレス，心理的ストレスの3つに分け，35の項目をそれぞれのカテゴリーに分類した。各カテゴリーの項目は，表4～6に示されている。

(1)　一般学生，体連の学生ともにストレスを感じない項目

一般学生，体連の学生ともに「当てはまらない」と答えた者の割合が80%以上になったのは，神経系ストレスの35）耳鳴りがする，身体的ストレスの4）呼吸が苦しくなる，11）胸部が締めつけられる気がする，17）動悸がする，心理的ストレスの14）生きているのがいやだ，18）恐怖心を抱く，の6項目であった。

(2)　一般学生，体連の学生ともにストレスを感じる項目

「非常に当てはまる」と回答した者の割合が一般学生，体連の学生ともに10%超えた項目は

6つあった。

身体的ストレスでは，5）朝起きられない（一般学生21.7%，体連の学生20.2%），9）身体がだるい（一般学生17.4%，体連の学生25.5%），31）身体が疲れやすい（一般学生18.2%，体連の学生20.1%）の3項目において，ストレスを強く感じていた。一般学生の約6割が自宅通学であり，通学時間も平均で約1時間半になっている。毎日の通学と大学での授業という生活を4月から3カ月以上送り，身体的にかなり疲労した状態になっている学生が少なくないといえるだろう。一方，体連の学生は6割近くが寮生活を送っているので通学時間は相対的に短いが，毎日の練習による疲労が蓄積していると思われる。

心理的ストレスでは，6）不安を感じる（一般学生14.9%，体連の学生14.0%），26）根気がない（一般学生11.6%，体連の学生11.5%），32）脱力感がある（一般学生11.2%，体連の学生11.1%）の3項目において，強いストレスを感じていた。このような結果は，大学という新しい環境での生活から生じる心理的ストレスを表しているのではないかと考えられる。

(3)　一般学生が体連の学生よりもストレスを感じる項目

「当てはまらない」と回答した者の割合に関して，一般学生の方が体連の学生よりも10%以上低かったのは，次の2つの心理的ストレスの項目だった。7）他人に会うのがいやで，わずらわしく感じられる（一般学生59.1%，体連の学生72.3%），15）心が暗い（一般学生63.4%，体連の学生74.9%）。両方の項目ともに，ストレスを感じていない学生の方が相対的には多数を占めているのだが，一般学生の中でサークルなどに所属せず，大学の中で居場所を見つけることができない者が，こうしたストレスを感じているのかもしれない。

(4)　体連の学生が一般学生よりもストレスを感じる項目

「非常に当てはまる」と回答した者の割合に関して，体連の学生が一般学生よりも多かったのは7項目あった。神経系ストレスは，10）びくびくしている（体連の学生6.0%，一般学生2.8%）だけだった。身体的ストレスは，4）呼吸が苦しくなる（体連の学生3.0%，一般学生1.7%），9）身体がだるい（体連の学生25.5%，一般学生17.4%），16）よく眠れない（体連の学生6.8%，一般学生3.6%）の3項目あった。心理的ストレスでは，1）悲しい気持ちだ（体連の学生11.1%，一般学生6.4%），2）頭の回転が鈍く，考えがまとまらない（体連の学生11.5%，一般学生7.9%），13）憤まんが募る（体連の学生9.4%，一般学生4.9%）の3項目だった。

これらの項目は，体連の学生の方が一般学生よりも1.5倍から2倍の比率でストレスを感じていた。これらのストレスを感じている体連の学生は人数的には少ないが，見過ごすことはできない問題である。

表4　神経系ストレスの程度

(%)

項　　目	一般学生			体連の学生		
	当てはまらない	当てはまる	非常に当てはまる	当てはまらない	当てはまる	非常に当てはまる
10)　びくびくしている	408 (77.1)	106 (19.9)	15 (2.8)	170 (72.3)	51 (21.7)	14 (6.0)
12)　行動に落ち着きがない	335 (63.2)	169 (31.9)	26 (4.9)	155 (66.0)	69 (29.3)	11 (4.7)
19)　動作が鈍い	335 (63.3)	162 (30.7)	32 (6.0)	165 (70.2)	61 (26.0)	9 (3.8)
35)　耳鳴りがする	465 (88.1)	53 (10.1)	10 (1.9)	217 (92.7)	16 (6.8)	1 (0.4)

表5　身体的ストレスの程度

(%)

項　　目	一般学生			体連の学生		
	当てはまらない	当てはまる	非常に当てはまる	当てはまらない	当てはまる	非常に当てはまる
4)　呼吸が苦しくなる	494 (83.0)	81 (15.3)	9 (1.7)	192 (81.7)	36 (15.3)	7 (3.0)
5)　朝起きられない	168 (31.8)	246 (46.5)	115 (21.7)	91 (38.7)	97 (41.3)	47 (20.2)
9)　身体がだるい	143 (27.0)	294 (55.6)	92 (17.4)	64 (27.2)	101 (47.3)	60 (25.5)
11)　胸部が締めつけられる気がする	431 (81.3)	87 (16.4)	12 (2.3)	194 (82.6)	37 (15.8)	4 (1.7)
16)　よく眠れない	384 (72.5)	127 (23.0)	19 (3.6)	166 (70.6)	53 (22.6)	16 (6.8)
17)　動悸がする	469 (88.5)	50 (9.4)	11 (2.1)	214 (91.1)	16 (6.9)	5 (2.1)
23)　頭が重い	371 (70.3)	137 (25.9)	20 (3.8)	177 (75.3)	50 (21.2)	8 (3.4)
31)　身体が疲れやすい	165 (31.3)	267 (50.6)	96 (18.2)	93 (39.7)	94 (50.1)	47 (20.1)
33)　胃腸の調子が悪い	341 (65.0)	136 (25.9)	48 (9.1)	172 (73.5)	52 (22.2)	10 (4.3)

全体として，ストレスを感じている学生はそれほど多くはないといえるが，身体的な疲労を訴える学生は一般学生，体連の学生ともに4割近くおり，新入生にとって大学生活は身体的ストレスを生み出すものになっているようである。そして，すでに述べたように体連の学生と一般学生のストレスの感じ方には違いも見られた。体連の学生と一般学生の生活の特徴を詳細に分析することによって，こうしたストレスがどのような原因によって生み出されてくるのかを，今後の縦断的調査で明らかにしていく必要がある。

（白　善美）

表6　心理的ストレスの程度

(%)

項　　目	一般学生			体連の学生		
	当てはまらない	当てはまる	非常に当てはまる	当てはまらない	当てはまる	非常に当てはまる
1）悲しい気持ちだ	262 (49.4)	234 (44.1)	34 (6.4)	133 (56.6)	76 (32.4)	26 (11.1)
2）頭の回転が鈍く，考えがまとまらない	202 (38.1)	286 (53.9)	42 (7.9)	81 (34.5)	127 (54.0)	27 (11.5)
3）不機嫌で怒りっぽい	286 (54.0)	212 (40.0)	32 (6.0)	129 (54.9)	95 (40.4)	11 (4.7)
6）不安を感じる	176 (33.3)	274 (51.8)	79 (14.9)	91 (38.7)	111 (47.3)	33 (14.0)
7）他人に会うのがいやで，わずらわしく感じられる	313 (59.1)	194 (36.6)	23 (4.3)	170 (72.3)	56 (23.8)	9 (3.8)
8）怒りを感じる	358 (67.8)	143 (27.1)	27 (5.1)	166 (70.6)	56 (23.9)	13 (5.5)
13）憤まんが募る	341 (64.6)	161 (30.4)	26 (4.9)	145 (61.7)	68 (28.9)	22 (9.4)
14）生きているのがいやだ	427 (80.6)	90 (17.0)	13 (2.5)	206 (87.7)	24 (10.2)	5 (2.1)
15）心が暗い	336 (63.4)	174 (32.8)	20 (3.8)	176 (74.9)	46 (19.5)	13 (5.5)
18）恐怖心を抱く	442 (83.6)	71 (13.4)	16 (3.0)	209 (88.0)	20 (8.5)	6 (2.6)
20）不愉快な気分だ	324 (61.1)	166 (31.3)	40 (7.5)	151 (64.3)	65 (27.6)	19 (8.1)
21）人が信じられない	379 (71.6)	125 (23.6)	25 (4.7)	173 (73.6)	52 (22.1)	10 (4.3)
22）気分が落ち込み，沈む	272 (51.4)	217 (41.0)	40 (7.6)	140 (59.6)	77 (32.8)	18 (7.7)
24）気がかりである	294 (55.7)	193 (36.6)	41 (7.8)	145 (61.7)	72 (30.6)	18 (7.7)
25）重苦しい圧迫感を感じる	376 (71.1)	120 (22.7)	33 (6.2)	174 (74.0)	49 (20.9)	12 (5.1)
26）根気がない	203 (38.4)	264 (50.0)	61 (11.6)	131 (56.0)	76 (32.4)	27 (11.5)
27）さみしい気持ちだ	265 (50.3)	214 (40.6)	48 (9.1)	137 (58.5)	75 (32.1)	22 (9.4)
28）自分の殻に閉じこもる	315 (59.7)	176 (33.4)	37 (7.0)	161 (68.8)	62 (26.5)	11 (4.7)
29）何も手につかない	351 (66.5)	148 (28.0)	29 (5.5)	173 (73.9)	51 (21.8)	10 (4.3)
30）泣きたい気分だ	389 (73.7)	111 (21.0)	28 (5.3)	187 (79.9)	31 (13.3)	16 (6.8)
32）脱力感がある	267 (50.7)	201 (38.1)	59 (11.2)	134 (57.3)	74 (31.6)	26 (11.1)
34）イライラする	320 (60.6)	172 (32.6)	36 (6.8)	153 (65.4)	65 (27.8)	16 (6.8)

3－2　ストレッサー尺度

本項では，学生達が新しい環境の中でどのようなストレッサーを意識しているかを調査する

ために，39項目の尺度を設けて調査した。ストレッサーの内容を区分して，表7のように「生活」「家族関係」「対人関係」「大学生活」「部活動」「自分自身」の6つのカテゴリーに分類して考察を試みたい。（表7）

回答は［0.体験していない，1.なんともなかった，2.ややつらかった，3.かなりつらかった，4.非常につらかった］の5段階評価法を用いたが，「3.かなりつらかった」と「4.非常につらかった」の合計頻数（%）を，それぞれのグループの「ストレッサー得点」とした。

一般学生と体連の学生のストレッサー尺度を比較するために，χ^2検定を試み表8のような結果を得た。（表8）

1） 39項目のうち「1～5%レベルの有意差あり」が28項目，11項目には有意差が見られなかった。「有意差あり」の項目のうち，「ストレッサー得点」は体連の学生の方が高い項目が大部分で，一般学生が高い項目は3項目のみであった。

2）「ストレッサー得点」が高い項目（30%以上）は，一般学生は1項目，体連学生は10項目であった。

3） 一般学生の上位5項目は「勉強が進まない」(31.7%)「自分の経済状態が悪化」(26.5%)「自分の性格を考える」(23.1%)「生活が不規則」(22.7%)「課題をこなすのが大変」(27.0%)の順であったのに対し，体連の学生のそれは「課題をこなすのが大変」(48.3%)「勉強が進まない」(45.8%)「部活動の束縛時間増加」(44.9%)「授業との両立に苦労」(39.3%)「生活が不規則」(38.2%)の順であった。

4）〈生活〉領域では，「生活が不規則」(一般学生22.7%，体連の学生38.2%)「自分の経済状態が悪化」(26.5%，37.2%)「生活上の仕事が増加」(12.3%，32.0%)の3項目が体連の学生が高く，「通学のラッシュが負担」(19.1%，7.7%)のみが一般学生の得点が高かった。他の4項目は「有意差なし」で得点も低い。ここでは「生活が不規則になった」と意識する学生，特に体連学生に多いのは何故か。今後の課題としたい。

5）〈家族関係〉領域では，「家族との時間が減少」(9.7%，21.5%)は体連の学生が高い得点を示して1%レベルで有意差が認められたが，他はいずれも得点が低かった。

「家族の誰かと議論，不和，対立があった」(9.1%，7.7%)は得点は低いものの「生活が不規則」の項目と併せて，今後の課題とすべきだと考える。

6）〈対人関係〉領域では，「悩みやトラブルに関わった」「友人関係が不調」を除く全項目に1～5%の有意差が認められたものの，全体的にストレッサー得点が比較的低い。「話題についていけない」「異性関係が不調」の項目の得点が比較的高く，1年次生の共通なストレッサーと考えられる。

表7　ストレッサー尺度（39項目）

<生　活>	1）生活が不規則になった	（生活が不規則）
	3）生活上の仕事（洗濯，炊事など）が増えた	（生活上の仕事が増加）
	7）自分の経済状態（生活費など）が悪くなった	（自分の経済状態が悪化）
	12）アルバイト先でトラブルを起こした	（バイト先でトラブル）
	22）通学中のラッシュが負担になった	（通学のラッシュが負担）
	24）隣近所が騒がしくなった	（隣近所が騒がしい）
	29）一人で過ごす時間が増えた	（一人の時間が増加）
	36）暇を持て余した	（暇を持て余す）
<家族関係>	2）家族の誰かと議論，不和，対立があった	（家族との不和・対立）
	4）家族と過ごす時間が減った	（家族との時間の減少）
	8）家族の経済状態が悪くなった	（家族の経済状態が悪化）
	11）家族や親しい親戚の誰かが病気やケガをした	（家族の病気・ケガ）
<対人関係>	5）友人や先輩とのつき合いがうまくいかなかった	（友人との関係が不調）
	9）友人や仲間から批判されたり誤解された	（友人からの批判・誤解）
	17）いっしょに楽しめる友人が減った	（友人が減少）
	20）仲間の話題についていけなかった	（話題についていけない）
	21）友人の悩みやトラブルに関わった	（トラブル等に関わった）
	23）友人関係がうまくいかなかった	（友人関係が不調）
	27）異性関係がうまくいかなかった	（異性関係が不調）
	32）回りの人から期待された	（回りからの期待）
<大学生活>	6）現在専攻している学問分野への興味が失せた	（専攻分野への興味喪失）
	13）大学生活について悩んだ	（大学生活に悩む）
	15）授業に興味がもてなくなった	（授業への興味を喪失）
	18）授業の課題やレポートをこなすのが大変だった	（課題をこなすのが大変）
	19）自分の勉強がうまく進まなかった	（勉強がうまく進まない）
	37）大学のキャンパスになじめなかった	（キャンパスになじめない）
<部 活 動>	10）部・サークルの活動内容について悩んだ	（部活動内容の悩み）
	16）部・サークルの活動で束縛される時間が増えた	（部活動の束縛時間増加）
	26）部・サークル内の人間関係がうまくいかなかった	（部内の人間関係が不調）
	33）授業と部・サークルの活動の両立に苦労した	（授業との両立に苦労）
	35）生活習慣（言葉やマナー）の違いにとまどった	（習慣の違いにとまどう）
	38）寮生活で規則による束縛やプライバシーの侵害を受けた	（寮の規則で束縛）
	39）部・サークル活動において自分の適性や能力について悩んだ	（部活動で能力を悩む）
<自分自身>	14）自分の容姿が気になるようになった	（容姿が気になる）
	25）体重が増えた	（体重の増加）
	28）自分の性格について考えるようになった	（自分の性格を考える）
	30）将来の職業について考えるようになった	（将来の職業像を考える）
	31）自分の能力・適性について考えるようになった	（自分の能力を考える）
	34）身体の調子が変化した（病気やケガも含む）	（身体が変調）

7）〈大学生活〉領域は，両者ともにストレッサー得点が最も高い領域で，「課題をこなすのが大変」(27.0%，48.3%)「勉強が進まない」(31.7%，45.8%)「授業への興味を喪失」(20.9%，

表8　一般学生と体連の学生の比較（χ^2 検定）一覧

＜生活＞	有意差	一般3	一般4	計(%)	体連3	体連4	計(%)	一般／体連
1）生活が不規則	P<.01	15.7	7.0	22.7⑤	11.1	17.1	38.2⑤	一般＜体連
3）生活上の仕事が増加	P<.01	6.6	5.7	12.3	9.8	22.2※	32.0※	一般＜体連
7）自分の経済状態が悪化	P<.01	11.9	14.6	26.5③	16.7	20.5※	37.2※	一般＜体連
12）バイト先でトラブル	—	2.1	1.7	3.8	1.3	1.7	3.0	
22）通学のラッシュが負担	P<.01	7.9	11.2	19.1	3.0	4.2	7.7	一般＞体連
24）隣近所が騒がしい	—	2.8	2.8	5.6	2.5	3.8	6.3	
29）一人の時間が増加	—	5.3	6.1	11.4	5.9	4.2	12.1	
36）暇を持て余す	—	5.5	4.2	9.7	3.8	5.9	9.5	
＜家族関係＞								
2）家族との議論	P<.05	4.4	4.7	9.1	4.3	3.4	7.7	一般＞体連
4）家族との時間の減少	P<.01	3.4	6.3	9.7	5.6	15.9	21.5	一般＜体連
8）家族の経済状態の悪化	P<.01	5.5	4.2	9.7	7.7	9.4	17.1	一般＜体連
11）家族の病気・ケガ	—	2.1	4.9	7.0	1.7	3.8	5.5	
＜対人関係＞								
5）友人との関係が不調	P<.01	6.4	3.0	9.4	7.3	7.3	9.4	一般＜体連
9）友人からの批判や誤解	P<.05	6.3	1.9	8.2	4.3	4.7	9.0	一般＜体連
17）友人が減少	P<.01	7.0	5.1	12.0	8.9	10.6	19.5	一般＜体連
20）話題についていけない	P<.05	4.7	3.8	8.5	8.1	6.8	14.9	一般＜体連
21）トラブル等に関わった	—	4.2	4.9	9.1	5.1	3.0	8.1	
23）友人関係が不調	—	4.9	3.2	8.1	4.7	3.4	8.1	
27）異性関係が不調	P<.05	5.1	7.0	12.1	4.2	12.7	16.9	一般＜体連
32）回りからの期待	P<.05	5.1	3.2	8.3	8.9	5.1	14.0	一般＜体連
＜大学生活＞								
6）専攻分野への興味喪失	P<.05	4.9	8.0	12.9	8.1	8.1	16.2	一般＜体連
13）大学生活に悩む	P<.01	9.7	10.4	12.1	7.3	17.2	24.5	一般＜体連
15）授業への興味喪失	P<.05	11.4	5.5	20.9	9.0	12.4	21.4	一般＜体連
18）課題をこなすのが大変	P<.01	13.6	13.4	27.0②	13.6	34.7※	48.3①	一般＜体連
19）勉強が進まない	P<.01	16.9	14.8	31.7①	15.3	30.5※	45.8②	一般＜体連
37）キャンパスになじめない	—	4.6	2.9	7.5	2.5	3.0	5.5	
＜部活動＞								
10）部活動内容の悩み	P<.01	10.4	6.3	16.9	12.8	15.8	28.6※	一般＜体連
16）部活動の束縛時間増加	P<.01	3.8	4.2	14.4	30.5	8.0	44.9③	一般＜体連
26）部内の人間関係が不調	P<.01	5.1	5.1	10.2	8.1	5.9	14.0	一般＜体連
33）授業との両立に苦労	P<.01	5.7	3.8	9.5	16.7	22.6※	39.3④	一般＜体連
35）習慣の違いにとまどう	P<.01	4.0	4.6	8.6	8.9	14.0	22.9	一般＜体連
38）寮の規則で束縛	P<.01	1.1	0.8	1.9	7.2	14.0	21.2	一般＜体連
39）部活動で能力に悩む	P<.01	5.3	3.8	9.1	9.3	16.1	25.4※	一般＜体連
＜自分自身＞								
14）容姿が気になる	P<.01	10.1	7.8	17.9	7.3	3.8	11.1	一般＞体連
25）体重の増加	P<.05	5.7	7.9	13.6	6.0	9.4	15.4	一般＜体連
28）自分の性格を考える	—	12.5	10.6	23.1④	10.2	10.6	20.8	
30）将来の職業像を考える	—	9.9	8.9	18.8	12.8	8.5	21.3	
31）能力・適性を考える	—	9.9	9.5	19.4	13.1	10.6	27.7※	
34）身体の変調	P<.01	7.2	6.3	13.5	9.4	11.5	20.9	一般＜体連

21.4%）「大学生活に悩む」（12.1%，24.5%）の項目で，一般学生，体連の学生に共通した高いストレッサー得点を示し，いずれも体連の学生の得点は高い。

一般学生のストレッサーはこの領域に集中している感があり，今後の支援を考えなければならない大きな課題といえよう。また「大学生活について悩んだ」「現在専攻している学問分野への興味が失せた」の項目は上記項目に比べて得点は比較的低いものの，「モラトリアム症候群の発現」や不登校による「大学生活からのドロップ・アウト」への傾斜を予感させられる重大な課題を含んでいると思われる。

8）〈部生活〉領域は，どの項目も体連の学生のストレッサー得点が高く，体連の学生の1年次生は様々な悩みを抱えていることがわかる。「部活動の束縛時間の増加」（44.9%）「授業との両立に苦労」（39.3%）「部活動内容の悩み」（28.6%）「部活動で能力に悩む」（25.4%）と続くが，これらは体連の1年次学生に共通した課題といえる。

また，「習慣の違いにとまどう」（22.9%）「寮の規則で束縛」（21.2%）「部内の人間関係が不調」（14.0%）等は，得点は比較的低いものの「スポーツ集団のしばり」に対する体連1年次学生のとまどいが浮き彫りにされている感がある。

スポーツ集団の業績と集団維持機能の向上を図るためには，解決しなければならない重大な課題といえよう。

9）〈自分自身〉領域では，「自分の性格を考える」（23.1%，20.8%）「能力・適性を考える」（19.4%，27.7%）等の自分自身の「内面的な悩み」に比較的高い得点が見られ，共通したストレッサーといえる。

また，体連の学生の「身体の変調」（20.9%）は，自分の身体状況に敏感なスポーツ選手の生活環境の変化からくる変調なのか，心因性のストレッサーが原因なのかは，現段階では不明であるが，スポーツ業績を高めるためには解決しなければならない問題といえるだろう。

「ストレッサー得点」は，一般学生に比べて体連の学生の方が相当高い得点傾向を示した。特に得点が高かった項目は，一般学生では「勉強が進まない」「自分の経済状態が悪化」「自分の性格を考える」「生活が不規則」「課題をこなすのが大変」と，各カテゴリーに分散したのに対し，体連の学生のそれは「課題をこなすのが大変」「勉強が進まない」「部活動の拘束時間増加」「授業との両立に苦労」「生活が不規則」と大学生活と部生活のカテゴリーに集中した。

今後は，特に体連の学生の「大学生活」と「部生活」によってもたらされるストレッサーの内容を解明して，その解決策の糸口を探る必要があると思われる。

（深瀬　吉邦）

4. 自己評価

自己評価については，ローゼンバーグの自尊心尺度（Rosenberg, 1965, pp. 17－18)の10項目を用いた。この10項目には自己の価値について，質問に肯定的に回答することによって自尊心尺度が高いものと，反対に低くなるものがある。これら質問により，現実の自己評価と理想の自己評価の差異をみることにより自尊心を測定し，考察をした。

1） 私は，全体的に自分自身に満足している

「あまりそう思わない」が一般学生43.8%，体連の学生40.7%と高く，両者ともあまり満足していない様子がうかがえる。しかし，一般学生は「ややそう思う」が30.7%となりやや肯定的に評価しているのに対して，体連の学生は「全くそう思わない」と否定的に感じている学生が28.4%とそれに次ぐ結果が見られ，自分自身に満足していないことを表している。これらのことから満足度については，全体的に一般学生の方がやや高く，体連の学生の方が低いという傾向が見られる。

2） 時々自分はよくないと考える

「ややそう思う」「非常にそう思う」とする学生が一般学生75.7%，体連の学生73.7%と7割以上を占め，自分自身を否定的に感じている学生が多いといえる。「全くそう思わない」「あまりそう思わない」は一般学生24.3%，体連の学生26.3%と，体連の学生の方が「思わない」の比率がやや高い傾向が見られる。

3） 私は，他の人と同じくらいに物事をこなすことができる

一般学生は「ややそう思う」「非常にそう思う」を併せると52.3%と半数以上の学生が自己評価が高いが，体連の学生は47.1%と半数に充たず，なかでも「あまりそう思わない」が36.9%と最も高い値を示している。これは一般学生に比して自己評価が低く現れていると思われるが，入学後間もない体連の学生にとって授業を通しての不安状況の現れともいえるのではないかと推測される。

4） 自分には，自慢できるものがあまりないと感じている

「ややそう思う」「非常にそう思う」と肯定的に感じている学生は，一般学生では54.3%と半数を超えているのに対し，体連の学生は46.2%である。反対に「あまりそう思わない」「全くそう思わない」は，体連の学生は54.5%と半数を超えているのに対し，一般学生は45.7%となり対照的である。これは大学1年次においてスポーツ推薦で入学した体連の学生にとって推薦資格であるスポーツ技術があること，又は推薦ではないが，スポーツ特技をもっていることが大きく影響し，一般学生と差が生じたものと考えられる。特に入学して日の浅い一般学生にとっては，まだ模索の段階ともいえるのではないかと思われる。

5）　時々，自分は役に立たない人間だと思うことがある。

「あまりそう思わない」が一般学生 33.0%，体連の学生 29.8%，「ややそう思う」が一般学生 32.0%，体連の学生 30.6% となり，それを併せると一般学生で 65.0%，体連の学生で 60.4% と約 6 割強の学生が自己の確立が不安定であるように思われる。しかし「全くそう思わない」が一般学生 20.3%，体連の学生 29.4% とあり，全体の傾向からはやや体連の学生の方が自己評価が高い傾向が見られる。一方に於いて「役に立たない人間」と思う学生が，一般学生 14.8%，体連の学生 10.2% ある。これは比率としては少ないが，およそ 1 割強の学生が「自分は役に立たない人間」だと思っているということは問題であり，今後検討する必要性が考えられる。

6）　私は，自分に対して肯定的な態度を持っている

「非常にそう思う」については一般学生 16.9%，体連の学生 14.9%，「ややそう思う」では一般学生 37.1%，体連の学生 29.4% で，肯定的な態度を持っている学生は，一般学生に多い傾向を示す。特に一般学生は「ややそう思う」が一番高率であるのに対し，体連の学生は「あまりそう思わない」が 34.5% と一番高く，体連の学生には肯定的な態度をとれない学生が 55.8% と半数以上を占める。これは絶えず集団の中で自己を抑える習慣からの現れとも考えられる。

7）　自分に対してもっと自信がもてたらと思う

一般学生と体連の学生にあまり差はなく，全体として「そう思う」学生が 72 ～ 74% を占めている。これは理想の自我に対する自己への要求の現れとも考えられる。

8）　自分には，よいところがたくさんあると感じている

「あまりそう思わない」が一般学生 49.1%，体連の学生 44.1% と多く，「全くそう思わない」を含めると一般学生 62.4%，体連の学生 64.9% となる。これは自分に対して謙虚さと同時に否定的に感じている様子がうかがえる。反面「よいところがあると思う」とする学生も一般学生で 37.5%，体連の学生で 35.2% ある。

9）　自分はいつでも失敗ばかりしていると思ってしまう

一般学生，体連の学生とも「ややそう思う」が一般学生 41.9%，体連の学生 36.0% と高く，次いで「あまりそう思わない」が一般学生 28.7%，体連の学生 31.4% となる。しかし「非常にそう思う」が一般学生 14.4%，体連の学生 12.7% と 1 割強を占め，自信喪失を起こしていることが懸念され心配される。

10）　自分は，少なくとも他の人々と同じくらいに価値のある人間であると思う

一般学生は「非常にそう思う」21.7%，「ややそう思う」42.2% と肯定的に思っている学生が 64% あるのに対し，体連の学生は「非常にそう思う」28.0%，「ややそう思う」28.8%，「あまりそう思わない」29.2% とおよそ同じ比率であると同時に，「全くそう思わない」も 14.0% と分散

傾向を示す。これは一般学生が入試を経て大学に入学したことへの充実感が現れているのに対し，体連の学生達に自分の価値を図りかねていることの現れと考えられる。一方，「価値のある人間と思わない」学生が一般学生に 9.1%，体連の学生に 14.0% いることは，大学に入学してもまだ自分の価値観をもち得ない学生のいることを表していると考えられる。

表9 自 己 評 価

（上段：人数，下段：%）

	一般学生				体連の学生			
	1	2	3	4	1	2	3	4
1）私は全体的に自分自身に満足している	104 (19.7)	231 (43.8)	162 (30.7)	29 (5.5)	67 (28.4)	96 (40.7)	57 (24.2)	15 (6.4)
2）時々自分はよくないと考える	36 (6.8)	92 (17.5)	265 (50.3)	134 (25.4)	29 (12.3)	33 (14.0)	136 (57.6)	38 (16.1)
3）私は他の人と同じくらいに物事をこなすことができる	62 (11.7)	190 (36.0)	217 (41.1)	59 (11.2)	38 (16.1)	87 (36.9)	79 (33.5)	32 (13.6)
4）自分には自慢できるものがあまりないと考えている	79 (15.0)	162 (30.7)	194 (36.7)	93 (17.6)	51 (21.6)	76 (32.2)	75 (31.8)	34 (14.4)
5）時々自分は役に立たない人間だと思うことがある	107 (20.3)	174 (33.0)	169 (32.0)	78 (14.8)	69 (29.4)	70 (29.8)	72 (30.6)	24 (10.2)
6）私は自分に対して肯定的な態度を持っている	60 (11.4)	182 (34.6)	195 (37.1)	89 (16.9)	50 (21.3)	81 (34.5)	69 (29.4)	35 (14.9)
7）自分に対してもっと自信がもてたらと思う	52 (9.9)	87 (16.5)	198 (37.6)	190 (36.1)	31 (13.1)	35 (14.8)	81 (34.3)	89 (37.7)
8）自分にはよいところがたくさんあると感じている	70 (13.3)	259 (49.1)	152 (28.8)	46 (8.7)	49 (20.8)	104 (44.1)	53 (22.5)	30 (12.7)
9）自分はいつも失敗ばかりしていると思っている	79 (15.0)	221 (41.9)	151 (28.7)	76 (14.4)	47 (19.9)	85 (36.0)	74 (31.4)	30 (12.7)
10）自分は少なくとも他の人々と同じくらいに価値のある人間であると思う	48 (9.1)	142 (27.0)	222 (42.2)	114 (21.7)	33 (14.0)	69 (29.2)	68 (28.8)	66 (28.0)

1…全くそう思わない
2…あまりそう思わない
3…ややそう思う
4…非常にそう思う

11） 自尊心尺度の合計点

学生達は，生まれてから家庭，学校等今まで生きてきた社会の影響を受け成長してきたのである。その中で形成された自己は，その後の社会活動を支配する重要な要素となるのである。自尊心の強いものは，自らの行動も積極的でかつ活動的であるのに対し，自尊心の低いものは自分の価値を低く評価することによって不安に反応することが多く，行動も不活発になりやすい。

ローゼンバーグ（Rosenberg, 1965）は，自尊心得点の低いものは高いものより不安感が強く，対人関係において孤立していたと報告している。

本調査では，合計点の平均は 24.1 点でこれを基準にしてみると，表 10 に示すように，一般学

生，体連の学生とも全く差異は見られなかった。

表 10　自尊心の合計点

（上段：人数，下段：%）

得　　点	一般学生	体連の学生
10 ～ 19	89 (17.0)	41 (17.5)
20 ～ 28	340 (65.4)	154 (65.0)
29 ～	92 (17.5)	41 (17.5)

自己評価について全体的には，現実の自己と理想の自己が交錯し不安定さが見られる。一般学生と体連の学生には大きな差異は見られなかったが，わずかではあるが特徴的な傾向が見られた。

①　両者ともあまり差異がなく高率なもの

「時々自分はよくないと考える」75% 前後

「自分に対してもっと自信がもてたらと思う」72 ～ 74%

「自分にはよいところがたくさんあると感じている」否定的なもの 62 ～ 64%

②　両者に特徴的なもの

一般学生は，「自分自身に満足している」，「他の人と同じに物事をこなすことができる」，「他の人と同じくらいに価値ある人間であると思う」がやや高い。

体連の学生は，「自慢できるものがある」についてはやや高い傾向が見られる。

③　高率ではないが検討を要するもの

「自分は役立たない人間である」，「いつも失敗ばかりしている」，「価値ある人間と思わない」と低い自己評価をする学生が 9 ～ 15% いる。

（西谷　明子）

5.　対人関係

私たちの社会，生活環境はお互いにそこに生きる人との連携により成り立っている。対人ネットワークは，日常的には意識されないものであるが，必要性に伴って活性化されるのが常である。またストレスの緩行作用をもち，適応を促進するともいわれている。特に入学時には新しく対人ネットワークを構成することになる。

本調査では，入学時より 3 カ月経過しているため新環境に属するネットワークも構成された

ものと思われる。調査では，対人ネットワークについて，どのような人がいるかを記入させたものである。これには自分と関わりの深い人，何らかの意味で大切な人を略名で記入し，その数を集計したものである。

対人ネットワークの人数を表11で示すように，1～30名までバラツキが見られ，一般学生と体連の学生に大きな差はない。これを5人単位の人数で区切って見ると，表11に示すようになるが，最も多いのが6～10人で3分の1を占め，次いで11～15名となり，6割近い学生が6～15名の対人関係を持っているといえる。一般学生と体連の学生では20名以下ではほぼ同じ比率であるが，21名以上にはわずかではあるが差が見られる。

（西谷　明子）

表11　対人ネットワーク人数

（上段：人数，下段：%）

	一般学生	体連の学生
1～ 5名	96 (21.1)	41 (18.8)
6～10名	160 (35.1)	80 (36.7)
11～15名	102 (22.4)	50 (22.9)
16～20名	60 (14.0)	29 (13.3)
21～25名	21 (4.0)	19 (8.7)
26～30名	13 (2.9)	11 (5.0)

6. ソーシャル・サポート

社会的支援，即ち個人を取り巻く様々な人的環境からの有形・無形の支援がストレス緩和に効果があるといわれている。ここでは，体連の学生と一般学生との評定解答を比較することによって学生達の精神衛生状態の現状把握を試みた。

今回は，嶋（1991，1992）のソーシャル・サポート質問紙の12項目を，

① 精神的・心理的な面での支援という内容の「心理的サポート」

② 娯楽活動や趣味を共有するという「娯楽関連的サポート」

③ 物的な援助や手伝いをするなどの「道具的・手段的サポート」

④ 問題解決のための情報提供という「問題解決志向的サポート」

の4因子に分類し，それぞれを「1. 本人と家族」，「2. 本人と同性の友人」，「3. 本人と異性の友

人」との関係に分けて分析した。

また，今回評定項目の「1. 全く当てはまらない」と「2. あまり当てはまらない」と答えた者を「当てはまらない群」，「3. やや当てはまる」と「4. 非常によく当てはまる」と答えた者を「当てはまる群」とし，この2群の比率の差異を「一般学生」と「体連の学生」とで比較しながら，ソーシャル・サポートの傾向を考察した。

6－1　あなた（本人）と家族との関係について

あなたと家族との関係

表12　心理的サポート

人数（%）

	一般学生	体連学生	
4）プライベートなことを話す	188（36.8）	101（44.9）	当てはまる
	309（62.2）	124（55.1）	当てはまらない
5）困った時に助言する，助言を受ける	271（54.5）	146（64.6）	当てはまる
	226（45.5）	80（35.4）	当てはまらない
6）気持ちや感情を分かり合える	240（48.3）	134（59.3）	当てはまる
	257（51.7）	92（40.7）	当てはまらない
7）個人的な悩みを話し合う	190（38.3）	119（52.6）	当てはまる
	307（61.8）	107（47.3）	当てはまらない

4）　プライベートなことについて話し合う

一般学生62.2%，体連の学生55.1%が「当てはまらない」と答えているが，44.9%の体連の学生が「当てはまる」との解答をしている点が注目できる。つまり，この年代の人達が親であれ兄弟であれ，家族とプライベートなことを話し合うこと自体稀少であり，健全なサポート体制があると考えられる。

5）　困った時に助言してもらったり，相手が困っている時には助言してあげたりする

一般学生54.5%，体連の学生では更に64.6%が「当てはまる」と答え，10%の差が出ている。これも体連の学生の方が家族との支援関係が濃密と考えられる。

6）　お互いの気持ちや感情を分かり合える

一般学生は51.7%が「当てはまらない」と答えているのに対し，体連の学生は59.3%が「当てはまる」と答えている。

7）　個人的な悩み事について話し合える

体連の学生では52.6%と過半数を越えているが，一般学生では「当てはまらない」方の比率が61.8%と多かった。

4項目のいずれも「当てはまる」と答えた比率は，一般学生より，体連の学生の方が高いことから，家族との関係における心理的なサポートは体連の学生の方が多く受けていると考えられる。

表13　娯楽関連的サポート

人数（%）

	一般学生	体連学生	
1）おしゃべりなど，楽しい時を過ごす	336（67.6）	159（70.3）	当てはまる
	161（32.4）	67（29.7）	当てはまらない
2）一緒に，遊びに出かける	190（38.3）	94（41.6）	当てはまる
	306（61.7）	132（58.4）	当てはまらない
3）共通の趣味や関心を持っている	180（36.3）	106（46.9）	当てはまる
	316（63.7）	120（53.1）	当てはまらない

1）　おしゃべりなどをして楽しい時を過ごす

一般学生が67.6%，体連の学生で70.3%と両者とも高率で「当てはまる」と答えているが，わずかに体連の学生の方が多い。

2）　一緒に遊びに出かけたりする

逆に一般学生61.7%，体連の学生58.4%とほぼ同率で「当てはまらない」と答えているが，これも若干体連の学生の方が肯定的解答が多い。

3）　共通の趣味や関心を持っている

一般学生63.7%，体連の学生53.1%が「当てはまらない」と答えてはいるものの，「当てはまる」と答えている体連の学生が46.9%と半数近くもいる。これは，スポーツ選手のスポーツ習慣は同じ趣味を持つ親兄弟の影響を受けている傾向があるのではないだろうか。

表14　道具的・手段的サポート

人数（%）

	一般学生	体連学生	
10）手伝って貰ったり，手伝ったりする	309（62.7）	167（74.6）	当てはまる
	184（37.4）	57（25.4）	当てはまらない
11）お金や物の貸し借りをする	291（58.5）	149（65.9）	当てはまる
	206（41.4）	77（34.0）	当てはまらない
12）プレゼントをあげたり，貰ったりする	220（44.3）	110（48.7）	当てはまる
	277（55.7）	116（51.3）	当てはまらない

10）忙しい時に手伝ってもらったり，相手が忙しい時には手伝ってあげたりする

一般学生は62.7%，体連の学生は74.6%と両者高率ながら体連の学生の方が11.9%多いことから，家の手伝いなどを億劫がらずに行い家族との互助関係が比較的出来上がっているといえないだろうか。

11）必要な時，お金や物の貸し借りをする

一般学生は58.5%，体連の学生は65.9%と，体連の学生の方が7.4%多い。

12）プレゼントをあげたり，もらったりし合う

一般学生44.3%に対して，体連の学生は48.7%が「当てはまる」と答え，その差4.4%と若干多い。

表15　問題解決志向的サポート

人数（%）

	一般学生	体連学生	
5）困った時に助言する，助言を受ける	271（54.5）	146（64.6）	当てはまる
	226（45.5）	80（35.4）	当てはまらない
8）いろいろな情報をやりとりする	339（68.2）	167（74.2）	当てはまる
	158（31.8）	58（25.7）	当てはまらない
9）分からないことを聞いたり教えたりする	339（68.4）	177（78.3）	当てはまる
	156（31.5）	49（21.6）	当てはまらない

5）困った時に助言してもらったり相手が困っている時には助言をしてあげたりする

一般学生54.5%，体連の学生64.6%が「当てはまる」群である。これは，ソーシャル・サポート因子中，最も基本的項目で心理的サポートと重複している。

8）いろいろな情報のやりとりをする

一般学生は68.2%に対して，体連の学生は74.2%が「当てはまる」と答え双方とも高率で多い。

9）分からないことを聞いたり，教えたりし合う

一般学生では68.4%，体連の学生は78.3%が「当てはまる」と双方高率で答えているが，ここでも体連の学生の方が10%程度多い。

6－2 あなた（本人）と同性の友人との関係について

あなたと同性の友人との関係

表16 心理的サポート

人数（%）

	一般学生	体連学生	
4）プライベートなことを話す	410（82.5）	180（79.3）	当てはまる
	87（17.5）	47（20.7）	当てはまらない
5）困った時に助言する，助言を受ける	427（85.9）	201（89.3）	当てはまる
	70（14.1）	24（10.6）	当てはまらない
6）気持ちや感情を分かり合える	365（73.6）	184（81.1）	当てはまる
	131（26.4）	43（19.0）	当てはまらない
7）個人的な悩みを話し合う	377（75.8）	175（77.5）	当てはまる
	120（24.1）	51（22.6）	当てはまらない

4） プライベートなことについて話し合う

一般学生82.5%，体連の学生79.3%と大変高率で「当てはまる」と答えている。しかも，3.2%とわずかではあるが一般学生の方が肯定的解答に関して比率が高い項目である。

5） 困った時に助言してもらったり，相手が困っているときには助言してあげたりする

一般学生85.9%，体連の学生89.3%が「当てはまる」と答えている。大変高い数値である。

6） お互いの気持ちや感情を分かり合える

一般学生が73.6%，体連の学生は81.1%が「当てはまる」と答えている。

7） 個人的な悩み事について話し合える

体連の学生では75.8%，一般学生77.5%が「当てはまる」と答えている。

4項目のいずれも，一般学生，体連の学生とも「当てはまる」と答えた比率は大変高い数値が出ている。これは，この年代の学生達にとって，同性の友人が精神的・心理的に最も重要な位置を占めているということであろう。

表 17　娯楽関連的サポート

人数（%）

	一般学生	体連学生	
1）おしゃべりなど，楽しい時を過ごす	472（94.9）	216（95.1）	当てはまる
	25（ 5.0）	11（ 4.9）	当てはまらない
2）一緒に，遊びに出かける	418（84.1）	200（88.1）	当てはまる
	79（15.9）	27（11.9）	当てはまらない
3）共通の趣味や関心を持っている	413（83.1）	188（82.8）	当てはまる
	84（16.9）	39（17.2）	当てはまらない

1）　おしゃべりなどをして楽しい時を過ごす

一般学生が 94.9%，体連の学生で 95.1% と両者ともほとんど全員に近い者が「当てはまる」と答えている。

2）　一緒に遊びに出かけたりする

一般学生 84.1%，体連の学生 88.1% とこれも高比率で「当てはまる」と答えている。

3）　共通の趣味や関心を持っている

一般学生 83.1%，体連の学生 82.8% が「当てはまる」と答えている。

3 項目とも，両者ともほとんど同比率で肯定的な高い数値を出している。また，この娯楽関係的な分野では一般・体連を問わず遊び相手は同性の比率が高く，同性の友人を持てない場合には，精神衛生上好ましくない事態が生じやすいのではないだろうか。

表 18　道具的・手段的サポート

人数（%）

	一般学生	体連学生	
10）手伝って貰ったり，手伝ったりする	386（78.3）	197（86.7）	当てはまる
	107（21.7）	30（13.2）	当てはまらない
11）お金や物の貸し借りをする	312（62.8）	159（70.4）	当てはまる
	185（37.3）	67（29.6）	当てはまらない
12）プレゼントをあげたり，貰ったりする	202（40.7）	84（37.2）	当てはまる
	295（59.4）	142（62.8）	当てはまらない

10）　忙しい時に手伝ってもらったり，相手が忙しい時には手伝ってあげたりする

一般学生は 78.3%，体連の学生は 86.7% と高率で「当てはまる」と答えているが，8.4% の差で体連の学生の方が多い。

11）　必要な時，お金や物の貸し借りをする

一般学生は62.8%，体連の学生は70.4%と若干数値が下がるものの「当てはまる」と答えている。良好なサポート関係が形成されているといえよう。

12） プレゼントをあげたり，貰ったりしあう

一般学生40.7%，体連の学生37.2%と肯定的意見はさらに低くなるが，生活習慣や民族的慣習の問題もあり，若者達のこの数字は，一般社会の慣習よりも多いといえよう。しかし，他2項目でははっきりと一般学生以上に肯定的な解答をしている体連の学生が，3.5%と小差ではあるが「プレゼント」の項では一般学生より低い値を示している。これは同性の友人との間では「物よりも心」という友情関係の現れと見なしてよいのだろうか。

表19 問題解決志向的サポート

人数（%）

	一般学生	体連学生	
5）困った時に助言する，助言を受ける	427 (85.9)	201 (89.3)	当てはまる
	70 (14.1)	24 (10.6)	当てはまらない
8）いろいろな情報をやりとりする	458 (92.3)	210 (92.5)	当てはまる
	38 (7.6)	17 (7.5)	当てはまらない
9）分からないことを聞いたり教えたりする	444 (89.5)	212 (93.4)	当てはまる
	52 (10.9)	15 (6.6)	当てはまらない

5） 困った時に助言してもらったり相手が困っている時には助言をしてあげたりする

一般学生85.9%，体連の学生89.3%と双方高率で「当てはまる」と答えている。

8） いろいろな情報のやりとりをする

一般学生92.3%，体連の学生92.5%と双方とも高率で「当てはまる」に答えている。

9） 分からないことを聞いたり，教えたりしあう

一般学生では89.5%，体連の学生は93.4%とこれも高率で「当てはまる」と答えている。

この問題解決志向の項目は大学日常生活そのものを問う内容になっているので，双方比較的高率でありながら差異があまりない。

6－3　あなた（本人）と異性の友人との関係について

あなたと異性の友人との関係

表 20　心理的サポート

人数（%）

	一般学生	体連学生	
4）プライベートなことを話す	249（50.8）	134（59.8）	当てはまる
	241（49.2）	90（40.2）	当てはまらない
5）困った時に助言する，助言を受ける	303（61.8）	152（67.9）	当てはまる
	187（38.1）	72（32.2）	当てはまらない
6）気持ちや感情を分かり合える	206（42.1）	124（55.1）	当てはまる
	283（57.9）	101（44.8）	当てはまらない
7）個人的な悩みを話し合う	238（48.4）	130（57.8）	当てはまる
	253（51.5）	95（42.3）	当てはまらない

4）　プライベートなことについて話し合う

一般学生は 50.8% が「当てはまる」，49.2% が「当てはまらない」と，ちょうど半々の数になっている。一方，体連の学生は9%多い 59.8% が「当てはまる」と答えている。

体連の学生は異性間でも，気さくにプライベートなことを話し合えるようである。

5）困った時に助言してもらったり，相手が困っている時には助言してあげたりする

一般学生 61.8%，体連の学生 67.9% が「当てはまる」と答え，6.1% 程度の差ではあるが体連の学生は異性との相談事にも積極的である。

6）　お互いの気持ちや感情を分かり合える

一般学生が 57.9%「当てはまらない」と答えているのに対し，体連の学生は 55.1% が「当てはまる」と答えている。これも体連の学生の方が異性とは壁が低いようである。

7）　個人的な悩み事について話し合える

一般学生は 51.5% が「当てはまらない」と答えているが，体連の学生では「当てはまる」方の比率が 57.8% と高い。

4 項目のいずれも「当てはまる」と答えた比率は，数値的には，5）困った時の助言……，以外は 50% 前後に集中している。また，全ての項目で一般学生より体連の学生の方が 10% 前後「当てはまる」と答えた者の数が多い。このことから，一般学生に比べて体連の学生は，異性とも気さくに話し合えサポート関係を作りやすいと，考えられる。

表21 娯楽関連的サポート

人数（%）

	一般学生	体連学生	
1）おしゃべりなど，楽しい時を過ごす	381（77.6）	179（79.6）	当てはまる
	110（22.4）	46（20.5）	当てはまらない
2）一緒に，遊びに出かける	239（48.7）	132（58.7）	当てはまる
	252（51.3）	93（41.4）	当てはまらない
3）共通の趣味や関心を持っている	240（48.9）	124（55.1）	当てはまる
	251（51.1）	101（44.8）	当てはまらない

1） おしゃべりなどをして楽しい時を過ごす

一般学生77.6%，体連の学生79.6%と両者とも高率で「当てはまる」と答えている。学園内の気楽な会話程度のものを考えての解答と思われる。

2） 一緒に遊びに出かけたりする

一般学生51.3%が「当てはまらない」と答えているのに対し，体連の学生は58.7%もが「当てはまる」と答えている。これは特定の友人や恋人ぐらいの重さがあるのではないか。

3） 共通の趣味や関心を持っている

一般学生51.1%が「当てはまらない」と答えてはいるものの，体連の学生の55.1%は「当てはまる」と答えている。

ここでも，気さくで陽気な体連学生のイメージが浮かび上がってくる。

表22 道具的・手段的サポート

人数（%）

	一般学生	体連学生	
10）手伝って貰ったり，手伝ったりする	264（53.9）	139（61.8）	当てはまる
	226（46.2）	86（38.2）	当てはまらない
11）お金や物の貸し借りをする	152（31.0）	83（36.9）	当てはまる
	338（68.9）	142（63.1）	当てはまらない
12）プレゼントをあげたり，貰ったりする	144（29.5）	98（43.6）	当てはまる
	345（70.6）	127（56.4）	当てはまらない

10） 忙しいときに手伝ってもらったり，相手が忙しい時には手伝ってあげたりする

「当てはまる」と答えている一般学生は53.9%，体連の学生は61.8%と家族や同性の時に比べると低い数値である。

11） 必要な時，お金や物の貸し借りをする

一般学生 68.9%，体連の学生 63.1% が「当てはまらない」と答えている。やはり異性間では金や物の貸し借りは遠慮するようである。

12）プレゼントをあげたり，貰ったりしあう

「当てはまる」が一般学生では 29.5% と少なくなるのに対して，体連の学生は 43.6% と比較では 14.1% も多い。気さくで陽気な体連の学生は異性とは物のやりとりをするようである。

表 23　問題解決志向的サポート

人数（%）

	一般学生	体連学生	
5）困った時に助言する，助言を受ける	303（61.8）	152（67.9）	当てはまる
	187（38.1）	72（32.2）	当てはまらない
8）いろいろな情報をやりとりする	354（72.3）	171（76.3）	当てはまる
	136（27.7）	53（23.6）	当てはまらない
9）分からないことを聞いたり教えたり	355（72.3）	164（72.9）	当てはまる
	136（27.7）	61（27.1）	当てはまらない

5）困った時に助言してもらったり相手が困っている時には助言をしてあげたりする

一般学生 61.8%，体連の学生 67.9% が「当てはまる」と答えている。

8）いろいろな情報のやりとりをする

一般学生 72.3%，体連の学生 76.3% と比較的多くが「当てはまる」と答えている。

9）分からないことを聞いたり，教えたりしあう

一般学生 72.3%，体連の学生 72.9% とほぼ同率で「当てはまる」と答えている。学内の日常生活では男女とも異性・同性を意識せず接しているようである。

家族との関係に関しては，4 因子 12 項目，全てにわたって一般学生よりも体連の学生の方が「当てはまる」と解答した者の比率が高い。このことは，一般的には，気さくで陽気なスポーツマン・ウーマンである体連の学生は，家族との意思疎通と交流がうまく行われており，そこからのソーシャル・サポートも良好な状態であると認められる。しかし一方，この年代の多くの若者がこの時期までに通過する「家族からの，特に親からの精神的自立」という側面からは問題がないとはいえないのかもしれない。

同性の友人との関係に関しては，4 因子 12 項目に関して一般学生と体連の学生の双方とも「当てはまる」と解答した者が同水準で高率を示した。これは，一般・体連を問わず学生達にとって，同性の友人が，非常に重要なソーシャル・サポートの対象になっていることをはっき

りと物語っている。したがって，何らかの事情でこの同性の友人との人間関係が悪化したり，友人関係そのものがうまく構築できない時や，作ること自体が不得意な学生にとっては精神衛生上好ましくない状態に追い込まれる可能性が高くなろう。

異性の友人との関係に関しても，4因子12項目，全てにわたって一般学生よりも体連の学生の方が「当てはまる」と解答した者の比率が高い。しかし，これは今回対象とした学生達の男女比が，一般学生で60%：40%に対して体連の学生は86%：14%と女子の比率がきわめて低いことから，回答の傾向が異性に対する男性的積極性となって現れた可能性もある。

いずれにせよ，気さくで陽気で人見知りしない体連の学生の明るい側面が，家族・同性の友人・異性の友人それぞれと良好な人間関係を構築しているとすれば，ソーシャル・サポートの観点からは望ましいのであるが，そのあたりの実態把握は更に検証と分析を深めていく中で考察する必要があろう。

（宮本　知次）

Ⅳ　ま　と　め

本論文では，大学生の学生生活への適応過程を縦断的に追跡する研究の第1回目の調査結果を報告した。調査対象は，本学1年生のうち，一般学生532名と体連の学生236名であった。得られた主な結果は，以下のとおりである。

1)　一般学生に比べて体連の学生は，大学への帰属意識がやや強く，学部・学科・専攻への帰属意識が弱かった。体連の学生は自分が所属する部への強い帰属意識を持っていた。

2)　体連の学生は，部活動で自分が活躍することを強く期待する一方，一般学生よりも，よい学業成績を取ること，専門的知識や高度の技術の習得，資格の取得などを期待しない傾向にあった。

3)　身体的疲労を訴える学生が，一般学生，体連の学生ともに4割近くおり，新入生にとって大学生活は強い身体的ストレスを生み出しているといえる。また，体連の学生は一般学生よりも，大学生活で不快と評価される出来事（ストレッサー）を多く体験しており，それは勉強に関するものと部活動に関するものに集中していた。

4)　一般学生と体連の学生とでは，自尊心の強さに大きな差異は見られなかった。自己評価の低い学生が1割程度いることが注目された。

5)　一般学生，体連の学生ともに，約6割の学生が6～15名の自分にとって大切な人からなる対人的ネットワークを持っていた。また，2割の学生は，1～5名しか対人的ネット

ワークに属する人を挙げなかった。

6）体連の学生は一般学生よりも家族，異性の友人からのソーシャル・サポートを強く受けていると考える傾向にあった。一般学生，体連の学生ともに，同性の友人からのソーシャル・サポートが家族や異性の友人からのソーシャル・サポートよりも大きいと判断していた。

本論文では，大学生活への意識，心身の適応状態，自己評価，対人関係，ソーシャル・サポートについての一次集計の結果のみを紹介したが，その中から，一般学生と体連の学生のそれぞれの特徴が浮かび上がってきた。今後は，1998年に実施される第2回調査のデータをも含めて，本論文で取り上げた5つのカテゴリー間の全体的な関連性について検討していくことが課題として残されている。

謝　　辞

調査の実施にご協力いただいた，本学助教授・市場俊之先生，同・森正明先生，本学専任講師・加納樹里先生，本学兼任講師・一 正孝先生，同・岩本淳先生，同・田中誠一先生に感謝いたします。

文　　献

中央大学全学アンケート調査委員会　1995　1992年度全学アンケート調査報告書―1992年4月実施―

小泉令三　1986　転校生の適応援助と学級経営，教育心理，34，564－569.

古城和子・岡野フミ子　1988 a　青年期女子の対人関係の構造分析(1)　日本教育心理学会第30回総会発表論文集，461－462.

古城和子・岡野フミ子　1988 b　青年期女子の対人関係の構造分析(2)　日本教育心理学会第30回総会発表論文集，463－464.

新名理恵・坂田成輝・矢冨直美・本間昭　1990　心理的ストレス反応尺度の開発．心身医学，30，29－38.

尾関友佳子　1990　大学生のストレス自己評価尺度．久留米大学大学院紀要・比較文化研究，1，9－32.

尾関友佳子　1993　大学生用ストレス自己評価尺度の改訂―トランスアクショナルな分析に向けて―．久留米大学年報，1，95－114.

尾関友佳子・原口雅浩・津田彰　1994　大学生の心理的ストレス過程の共分散構造分析．健康心理学研究，7(2)，20－36.

Rosenberg, M. 1965　Society and the adolescent self-image. Princeton N.J. : Princeton University Press.

嶋信宏　1991　大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究．教育心理学研究，39，440－447.

嶋信宏　1992　大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果．社会心理学研究，7，45－53.

田中祐子　1995　単身赴任による家族分離が勤労者の心理的ストレスに及ぼす影響—ストレス反応を中心として—．心理学研究，65，428－436.

都筑学・石田武・西谷明子・早川宏子・深瀬吉邦・八島健司　1991　運動部系学生の不安についての意識調査．中央大学保健体育研究所紀要，9，1－15.

山本多喜司・Wapner, S.　1992　人生移行の発達心理学　北大路書房.